



# 金剛寺野古墳群 - 渡来系集団とその墓地 -

愛荘町立歴史文化博物館  
学芸員 三井 義勝

## 1. 金剛寺野古墳群

宇曾川右岸に形成された緩やかな扇状地の扇央部（愛荘町 上蚊野・蚊野外）には、古墳時代後期、滋賀県下において最大規模の金剛寺野古墳群が築られました（図1）。昭和4年（1929）に刊行された『近江 愛智郡志』巻1によると、古墳の数は上蚊野に102基、蚊野外に196基、あわせて298基の古墳が分布していたことが「見取図」（図2）とともに記載されています。



図1 金剛寺野古墳群位置図

## 2. 蚊野外に広がる古墳

開墾によって古墳の多くが墳丘を失いましたが、昭和36年（1961）に撮影された空中写真をみると、蚊野外には「見取図」に描かれているように、大小様々な円墳が隙間なく密集していたことがわかります。さらに写真を詳しく見ると、古墳や古墳状の起伏は約182基確認できますが、そのなかには、横穴式石室の存在がわかるものもあります。

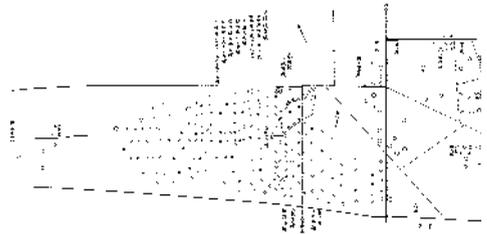


図2 『近江 愛智郡志』巻1掲載見取図



写真1 昭和36年（1961）撮影空中写真（蚊野外上空）

### 3. たぬき塚古墳

古墳は現在22基しか残されていませんが、そのうち10基については「依智秦氏の里古墳公園」として整備されています（写真2）。

ここでは、史跡公園整備に伴い発掘調査を行った古墳のうち、たぬき塚古墳（狸穴塚ともいう）を紹介します（写真3・図3）。

たぬき塚古墳は上蚊野に所在する墳径約



写真2 依智秦氏の里古墳公園



写真3 たぬき塚古墳（整備前）

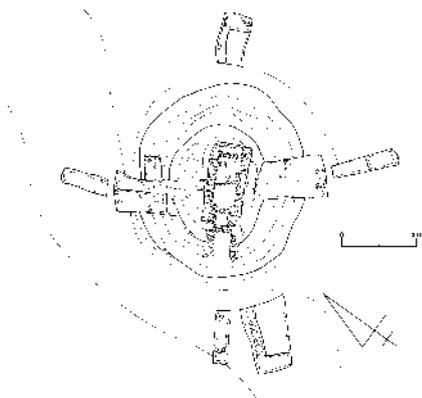


図3 たぬき塚古墳墳丘平面図

16m、残存する高さ約2.3mを測る横穴式石室をもつ円墳です。石室の入口は南側に設けられており、発掘調査では墳丘を廻る周溝の一部が確認されています。

横穴式石室は、死者が葬られる玄室が全長約4m、幅約1.6mを測る両袖式のもので、これに長さ約3.9m、幅約1mの羨道が付きます（図4）。玄室の床には直径15cmほどの石が全面に敷きつめられ、部分的に赤色の顔料が認められました。

### 4. 階段状の段差がある石室

たぬき塚古墳に築かれた横穴式石室は、玄室と羨道の境に約35cmの段差を設けて階段状に構築されています（図4・写真4）。滋賀県内では同様の石室が、特に旧愛知郡と旧蒲生郡に分布することがわかっています。

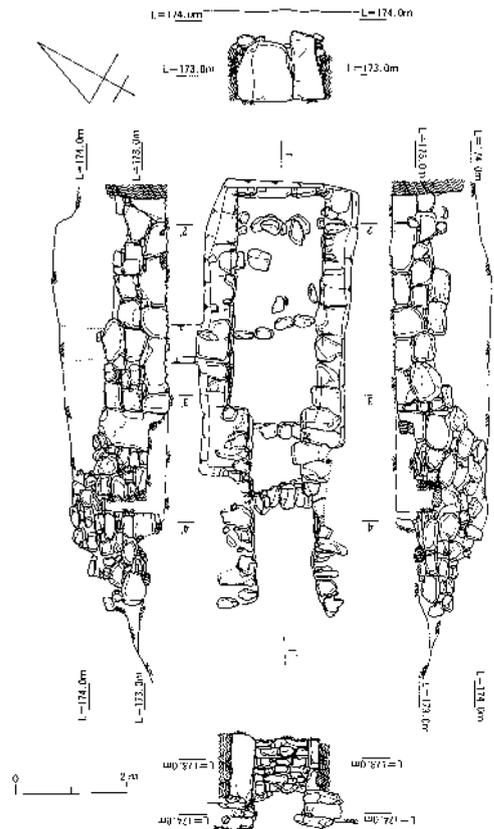


図4 たぬき塚古墳石室実測図



写真4 たぬき塚古墳石室



写真6 須恵器脚付長頸壺



写真7 刀子 (小刀)



写真8 碧玉製小玉

## 5. 突起状石材 (突起石)

石室の南壁には壁から北西方向に15cmほど突き出た「突起状石材」(以下、「突起石」と呼びます)を検出しました(写真5)。

突起石は、半世紀ほど前からその存在が知られており、当時は肥後(現在の熊本県)に



写真5 たぬき塚古墳玄室 (突起石)

多く分布すると指摘されていました。現在では九州北西部、有明海沿岸の5世紀後半から6世紀前半の古墳に集中することが明らかとなり、また、近江にも存在することがわかりました。

近江では、たぬき塚古墳のほかに、高島市マキノ町牧野にある西牧野古墳群に属する齊頼塚古墳<sup>らいづか</sup>や、草津市山寺町にある北谷古墳群中の北谷5号墳で見つかっています。

このように近江においては、6世紀前半から6世紀後半にかけて築造された古墳に見られますが、その系譜や機能などの詳細については不明な点が多く、今後の課題として残されています。

## 6. 出土遺物

たぬき塚古墳の玄室床面からは6世紀後半から7世紀初頭の須恵器杯身・杯蓋・広口壺片・長頸壺・脚付長頸壺、刀子（小刀）や釘などの鉄製品、碧玉製小玉、銀環（耳飾）が出土しています（写真6～9）。



写真9 たぬき塚古墳出土銀環（耳飾）

## 7. 渡来系氏族「依智秦氏」との関係

最後に、金剛寺野古墳群を構成する数多くの古墳を築造した人々について少しふれておきましょう。

金剛寺野古墳群が築造された時期よりも年代は降りますが、奈良時代や平安時代の史料には、愛智郡に居住していた渡来系氏族として秦氏一族（秦公など7氏）の名前が見え、彼らの多くは、愛智郡に本拠を置く秦氏として「依知秦」「依智秦」を名のった「依智秦氏」の一族であったと考えられます。そして当時、愛智郡の郡政を掌った郡司は、依智秦氏が独占的に担っていました。

古代の愛智郡においてこれほどまでに大きな勢力を築いた依智秦氏一族はいつ頃、何を契機に、どこからこの地に来たのか。その多くはいまだ謎に包まれたままですが、このことを推測させる資料がいくつか挙げられます。

『日本書紀』孝徳天皇大化元年9月戊辰（3日）・丁丑（12日）条に「えちはずののみやつくたくつ朴市秦造田来津」の名が見えることから、孝徳朝（645年～654年）において近江のエチを本拠とする秦氏の存在が窺えます。

また、愛荘町長野・石橋に所在する、なま



写真10 なまづ遺跡 土壁造り建物遺構

物遺構が見つかっています（写真10）。

類似する構造の建物遺構は大阪府や奈良県、愛知県でも発見されていますが、特に滋賀県内では、渡来系氏族である志賀漢人<sup>しがのあやひと</sup>が居住していたと考えられる大津市北郊の穴太から滋賀里にかけて、なまづ遺跡よりやや時期が遡る土壁造り建物遺構が多数見つかっています。このことから、愛智郡にも古墳時代から渡来系集団が居住していたことが推測できます。

また、先に、たぬき塚古墳の特徴として「階段状の段差がある石室」を挙げましたが、この石室は、朝鮮半島から日本（九州北部）に導入された初期の横穴式石室（竪穴系横口式石室）の影響を受けていると指摘されています。しかし、九州北部の竪穴系横口式石室のように、板石を小口積みにしなない石室構造や築造年代など、いくつかの異なる点も同時に指摘されています。

金剛寺野古墳群の調査では、石室が現存していた古墳10基のうち、3基が階段状の段差がある石室をもつことが確認されました。皆さんもお察しのとおり、先に述べた史料や考古資料から、金剛寺野古墳群は渡来系氏族である依智秦氏一族の祖先が築いた墓地である可能性が高いと考えられるのです。

### 滋賀文化財教室シリーズ No.225号

発行年月日 2008年3月7日  
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2  
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525